は盛んだった。『新選軍歌集大全』（明治二十六年六月、神保孝慶編）には神保の作と思われる「福島中佐単騎遠征」が、岡本敬之助（岡本綺堂の父）が編んだ『軍人学生必読　進撃新軍歌』（明治二十七年七月）には岡本の作「福島中佐単騎遠征」、「福島中佐歓迎の歌」が収められている。前者は「（福島の）功烈を称揚」（序文）するためであり、後者は「近ごろ軍歌なるもの大に世に行なはれ（略）日に月に新著続出す」（叙文）る時流を汲んで、福島の事蹟を軍歌にしたとあり、両者の創作態度はほぼ同じである。

日清戦争が終わっても単騎遠征熱はなかなか収まらなかったらしい。『近世唱歌集』（明治二十八年三月、鷹野国蔵著）には鷹野が作曲作詞した「単騎遠征」が入っている。本書も歌曲によって「忠君愛国の心を興奮」することを目的としていた。

荒正人は福島の探検記『単騎遠征』を「日本人としての誇りを強くもち、未開人や土着の人間に対して優越感をもっていた（略）若々しいナショナリズムの所産」（『世界ノンフィクション全集』解説）と評している。

明治の軍人の「若々しいナショナリズム」は、学者や教育者を刺激し軍歌を創作させたのである。

ⅲ落合直文の『騎馬旅行』

落合直文も福島の業績に刺激されたひとりだった。落合は野際と同じような構想の長編新体詩『騎馬旅行』（二十一章一〇四〇行）を出版している。発行は国語伝習所、印刷は明治二十六年六月二十九日、福島が東京に帰って来るまさにその日である。（この本は売れゆきがよく、七月十二日には再版となっている。）

『騎馬旅行』の「その三」の部分が、軍歌「波蘭懐古（ぽーらんど）」となって流布するようになるのだが、まず『騎馬旅行』が生まれた経緯を「騎馬旅行序」（『萩之家遺稿』）にみてみよう。

長いので要約すると、〈友人のひとりが「中佐のために、長歌をよみてはいかに」と言ったことがきっかけで、「偕行社記事」を読んだところ「欽慕の情おこりてやまず」、与謝野寛、鮎貝盛影（直文の弟）に相談した。二人の賛同を得られたので早速とりかかった。多くの来客やら大学の試験やら蚊の襲来やらの障害を乗り越えて、六月二十三日午前十時から稿を起こし、二十六日午前三時に脱稿した。要したのは六十五時間〉ということになる。文章は具体的で詳しく、ユーモアを交え読ませるのだが、『騎馬旅行』はなぜか「序」を欠いている。

「序」は創作が締め切りぎりぎりになった言い訳のように読める。

直文は『騎馬旅行』に取りかかるほぼ一年前、新聞「日本」（明治二十五年七月五日）と「国文」（同年七月二十日）の二ヶ所に全く同じ文章「騎馬旅行」を寄稿している。福島の遼遠な前途を思い「蒙古はいかにイルクツクはいかに。おのれは、そを思ひやる毎におぼえす涙をそそきぬ。（略）あはれ、やまと男児の、このひとり旅、天地神祇は照覧ましますか否」と旅の成功を願い、留守宅を守る妻の「温良貞淑」さも讃える。こうした熱情は当時の日本国民が感染していたもので、直文が人一倍志士的であったと示唆するものではないが、この時すでに創作意欲はかき立てられていたと思われる。「騎馬旅行」の「こたびの騎馬旅行をきくや実に欽慕の情、やむ能はざるものあるなり」は、「騎馬旅行序」に「（偕行社記事を）よみもて行くに、中佐の旅行のことども、詳に載せたり。おのれ、欽慕の